



第7回 地域共生社会推進全国サミット in かが  
ともに支え合う健康で心豊かなまちづくり

---

# 分科会 C

---



# 分科会 C

令和7年11月21日(金) 13:20▶15:00 加賀市文化会館 ホール



## ～持続可能な地域介護・福祉サービス体制の構築～

司 会 ▶	おおしま <b>大島</b>	かずひろ <b>一博</b> 氏	筑波大学 教授 (協働大学院)
登壇者 ▶	おおくま <b>大熊</b>	みつる <b>充</b> 氏	うきはの宝株式会社 代表取締役
	くろいわ <b>黒岩</b>	なおふみ <b>尚文</b> 氏	全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会 理事長
	とう <b>党</b>	かずひろ <b>一浩</b> 氏	福岡市認知症フレンドリーセンター センター長 NPO 法人とかの元気村 副理事長
	もりた <b>森田</b>	ゆき <b>有紀</b> 氏	あったかふれあいセンターとかの コーディネーター



▼大島：お食事されて、だんだんと眠たくなる時間だと思いますが、1時間40分、100分のセッションのおつき合いをお願いしたいと思います。

私は、地域共生政策自治体連携機構事務局長をしております。自治体の皆様と人口減少の中で、いかに地域が元気で、住みやすさ、それから生きがいがあって、いわゆる well-being な地域社会がつかれるかということと一緒に考える NPO ですが、今日この分科会Cもそれにふさわしいテーマだと思います。

持続可能な地域介護・福祉サービス体制の構築というテーマであります。

単にサービスだけではありませんで、そこに暮らす住民にフォーカスをして、そこでの支え合い助け合い或いは住まいの問題、それから、生きがい就労とか、そういう健康予防介護予防も合わせたような広いテーマの中で、今日4人の現場で取り組んでいらっしゃる方々の報告をもとに、一緒に考えていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

最初に、今日4名来ていただいています、福岡の方が2人いて、鹿児島の方がお1人で、それから高知の方がお1人ということで、全国、西日本中心ですけど集まっています。

最初に15分ずつぐらいそれぞれのご自身の紹介とやってらっしゃる取り組みのご紹介をいただきたいと思っています。

そのあと、5人でざっくりばらんな議論をしていきたいなと思っています。

最初、この座っていらっしゃる順に従いまして、うきはの宝株式会社の大熊様からお願いいたします。



▼大熊：皆さんはじめまして。福岡のうきは市というところからきております。私たちは「ばあちゃんビジネス」75歳以上のばあちゃんたちが働く会社つというのを展開している会社になります。

私は介護とか福祉の業界には1度も関わったことがなく、ただの民間の営利の企業で、ばあちゃんたちと、真正面から一緒に働いているっていうような、会社になります。私たちは、ばあちゃんたち、高齢者の働くっていうところの可能性を日本中に示すという形で、今は九州の福岡県が中心ですけども全国に展開してっております。私自身はですね、そもそも高齢者分野も関わったことはなくて、デザイナーですね、デザイン思考とかデザイン経営、デザインっていうのが、日本の中ではどうしても装飾とか、ビジュアルっていうところが強く印象づけられていますけれども、私は課題解決の手法にデザインを使うっていうような形で、ビジネスをしております。2019年からこちらのばあちゃんビジネスを展開して、今7期目になっております。一部、下に、うちの自社ブランドですね、うちの特徴としては何か下請け孫請で仕事作業をするんじゃなくて、ばあちゃんたちとともに自社ブランドを展開して、高い収益を上げていって、ばあちゃんたちに報酬を分配するみたいな仕組みですかね、ばあちゃん喫茶、ガールズ婆とかばあちゃんの学校、ばあちゃん飯、婆ッフル、ばあちゃん新聞といった、他にもありますけれども、こういったブランドを運営しております。今は私たち直営だけじゃなくて、フランチャイズだったり、コンサルティングで指導したり、提携したりで全国にも広がってますので、とにかくおばあちゃん方の働く仕事と働く場を作っていこうとしており

ます。

突っ込みどころがあると思いますけれども、おじいちゃんを外してるわけではないんですけれども、ちょっと苦戦しております、じいちゃんの方は、今どうしてもおばあちゃんたちの得意と特性を生かした食とか料理をメインにサービス展開していますので、おじいちゃんは、おじいちゃん「じいちゃんビジネス」っていうのを別で展開しようと、今四苦八苦してるんです。

広くこういうふうには、おばあちゃんビジネスを知っていただく機会も多くなってきてるんですけれども、スライド真ん中のおばあちゃんは幾つぐらいに見えますかね。70歳ぐらいって聞こえてきましたので、もう真ん中のおばあちゃん90歳を超えておまして、左側でも84歳、右側は最若手とか若手で78歳と、75歳以上の働く会社ですので、平均でいうとこちらは84歳ですかね。店長や責任者が85～6歳っていうような、ちょっと普通に考えたらあり得ない、かなりの高齢の方がバリバリ働いてくださってるっていうような形ですね。あとはもうこれは学者さんたちがうちに入って、ちゃんとエビデンスとってくださいってるんですけど、働く。若く美しく見える人を私がスカウトしてきてるのではなくて、間違いなく老化を抑えてるってことがわかってきますので必然的に女性の方はですね、日々、他人とかお客さんと会いますので、美しく保とうってことで、綺麗にされたりするんですけども、やっぱり老化を抑えられてるってのは間違いはないかなと思ってます。

私たちの取り組みがですね、小学館という大手の出版社ですけども、「おばあちゃんビジネス」ってタイトルで、ノウハウ本というかな、我々の7年間を詰め込んでおりますので、今日はちょっと15分しかお話する機会ありませんので、もし気になる方がいたら、Amazonとか書店で売ってますので、ぜひ、この本に今日の1万倍ぐらいの内容を詰め込んでおりますので、ぜひ見ていただければなと思ってます。私たちはですね、もちろんスタート時はおばあちゃんたちにやっぱ、国民年金だけではちょっと生活が苦しかったりとかそういうのもあるので、収入、生きがいっていうところだったんですけども、最近わかってきたのが、働く健康寿命がむちゃくちゃ伸びてるってこと。

これもやっぱり研究者の方々からエビデンスとして我々も教えてもらっているんですけども、認知症の発症や進行を抑えていく効果があるっていうことが随分わかってきたっていうようなところなんです。私は全然専門職じゃないので、そもそも認知症の方とか介護受けてる方とかそういうラベリング的なことは全く関係なくて、私から見たら、ただのおばあちゃんっていうところで、実際、介護施設からうちに働きに来てもらったり、フラットに、おばあちゃん働いて意欲があって、お客さんを喜ばせる気持ちがある方はどうぞっていう形でいろんな方が働きに来てくださってます。

アメリカの大学ではあるんですがスタンフォード大学の教授とかがですね、うちに来てくださって世界に私たちの取り組みと効果を発表して下さったりもあって、世界中の方々注目して下さっています。僕も最初気づいてなかったんですが、世界から見たら日本が先行して超高齢化社会という課題が与えられてるといってか直面してて、どう日本がその課題に対して乗り越えていくのかを本当に世界が注目してるっていうところですね。ネットフリックスの中で、かなり人気の番組がありますが、そこでは健康長寿の番組をやっているぐらい世界は健康に、そうですね、健康寿命を延ばしてっていうのに注目してるような形になります。

取り組みとしては、おばあちゃんたちがやりたいって言って始めたんですけど、食を次の世代の方々に伝承したいってことで、おばあちゃんたちの食と料理を商品。サービス化したり、おばあちゃん新聞っていう月刊誌を発行したり、あとは「おばあちゃん喫茶」という店舗が今勢いよく全国に広めていまして、地域のおばあちゃんたちが地域の喫茶店に働きに来るっていう喫茶店を展開しています。あとは私たちのうきはの宝のホームページにも載せてますけど、おばあちゃんフェスとか、おばあちゃんのファッションショーとかいろいろイベントも展開しております。

その他、国、自治体はじめ大企業とかに、シニアに関するコンサルティングとかマーケティングっていうところをアドバイスしたりする仕事もしております。

ちょっと時間も近づいてきたかなとは思いますが、我々は高齢化率60%超える中山間地で

スタートしてますので、やはりおじいちゃんおばあちゃんたちだけじゃなくて、やっぱり若者に仕事がないってところも過疎地の悩みでして。おばあちゃんたちを主役にして、僕も含めて若い人たちがそれで飯を食っていくっていうような仕組みを作っています。

ちょっと我々当初こだわりがあって補助金、助成金は使わずにばあちゃんの手だけで収益を上げるっていうのを宣言して発展してきましたので、そうですね、どちらかといったら我々は受け取るというか、納税という税金を納めて発展させていくっていう方を選択して広げていっております。なので、当初設計ですけれども、高齢者も若者世代も Win-Win が広がり、八方良しみみたいな形を作っていければなというところで進めています。私たちの会社そのものとしても、そもそも 75 歳以上の方に、生活がちょっときつくなってきたり、あと一番大きいのは、役割を失ってすることがないとかもうちょっと生きてる意味が無いとか言う地域のおばあちゃんおじいちゃんたち結構いらっちゃって、そういう方々に働くが別に完全な正解ではないと思うんですけれども、一つ働く場で役割をつくれたらなっていうことでアプローチをし続けております。もう計画段階から 10 年近くやってますので、当時はその選択肢がなかったんですよ。働くっていったって、どこも民間企業は求人出しておりませんので、我々が切り開いていこうということで高齢者の就労の選択肢と機運を高めていこうと広げていっております。

右は、ちょっと先ほどの説明した、最初は生きがいと収入から健康に繋がって、やはり働くと社会保障費、医療費を抑えていく効果もありますし、認知症も予防するとか治すじゃなくて、間違いなく働くの中には認知症の進行のスピードを抑えるっていう効果がありますので、それをやっていくっていうところですね。

スタートは過疎地域だったんですけど、それは大熊君が故郷で田舎でやってるからうまくいったんでしょって言われて、僕は過疎地域のおばあちゃんの可能性を示すんじゃないかって、おばあちゃんっていう可能性を全国に示すっていうところで、今は過疎地域の田舎から飛び出て、ばあちゃんがいるここはどこでもこれはできるってことで都市圏に進出して

ます。反対のバージョンですね、田舎から都会に攻め立てるような会社になります。

ばりばり意欲があって体も動くばあちゃんと介護施設とか認知症になったおばあちゃんたちも一緒に働いてますので、忘れっぽいばあちゃん達も全然、普通に働いていただけてるっていうような形です。

僕は、全然福祉介護の業界に一切関わったことないので、ただのばあちゃんって見てるんですけど、僕はやっぱりこのばあちゃん喫茶というお店で、認知症であったとしても、介護を受けてたとしてもですね、役割があれば輝けるってところを証明したい。というか実際現場でそれが証明されているので、これをやはり広げていきたいなと思っています。

僕は、全然料理できないんで逆におばあちゃんたちに教わることばかりですし、おばあちゃんたちにお任せして、店舗によってはもう経営もおばあちゃんたちに任せてるような状況ですので、私たちがちょっと違うのは、おばあちゃんたちをケアしようとか保護しようって気が全くなくて、お客さんを常に見ているってことですね。お客さんを喜ばせればお金が回るよねっていう、ビジネスの基本ですね。

どっちかというところ、ばあちゃんたちを仲間にしてビジネスを本気でやってお客さん喜ばせて儲けているっていうようなところで、必ずおばあちゃんたちに最初に入ってもらったとき唯一の条件は、お客さんを喜ばせ続けることができますかっていうのを 90 歳とか超えるおばあちゃんに問うてるっていうところですね。おばあちゃんたちはやっぱりおもてなしの精神も強くて、相手を喜ばせようっていうのを皆さん持っていますので、ここはもう合致してお客さん商売をやってるっていうような形になります。

こういう形で、僕は一度も介護の現場出てませんので、認知症を患ってらっしゃるおばあちゃんとかってのは、僕は全然わからないんですけど、ごくごく僕は対等に一緒に働いてるだけで、あと、おばあちゃんたちも別に認知症になったからって、何か人生が終わるとかそういうこと全くなくて、やっぱり聞くと、稼いで旅行に行きたいとか、買いたいものとかですね、タバコ買いたいとかいうおばあちゃんもいますし、そういうのを僕が保護してかなえてあげるんじゃないかって、あなたたちが働いて稼いで、旅行行きたいんだったらその稼いだお金で行きなさいって

ことで場を僕が作りますって、もう皆さん 90 歳近いのに、エイエイオーでみんな一致してですね、今お店 7 店舗ぐらいやってる形であります。いろんなおばあちゃんたちがいますけれども、こういう形で働いております。

最後にですね、確かに 80 歳 90 歳の人たちだけ集めて会社が運営できるのかっていうとこなんですけれども、それはやっぱりできなくて、我々のポイントとしては、ポツポツ若者が入ってるんですけども、あとじいちゃんもちょっと追加してますけど、この 18 歳から 93 歳までの多世代型協働、多分僕が作った造語ではあるんですけど、多世代が交流するんじゃなくて協力して働くっていう仕組みを作って今全国に広げてます。

なので、圧倒的な人数の比率は、ばあちゃんとかじいちゃんですけれども、その裏では、ビジネスサイドで私とか若い子たちがビジネスをしていってるという仕組みですね。それで若者も生活していると、僕も含めてそれで収益を上げて食べてるっていうような形です。

なので見方によっては、おじいちゃんおばあちゃんたちをこき使ってるのかもしれないけど、うちのスタッフのおばあちゃんたち、みんなこき使ってくれて逆に言って。

なので、そこは合致して、一緒に地域のおばあちゃん方と、今は全国に展開していますので、どの地域でも展開して、おばあちゃん方と働いてるっていうような会社になります。

すいませんちょっと時間過ぎたかもしれませんがそれでも。私は以上になります。

▼大島：ありがとうございますございました。1つだけ、私もばあちゃん喫茶行きたいと思ったんですけど、7ヶ所ってのはどこにあるんでしょうか。

▼大熊：福岡県です。

▼大島：7ヶ所が何市あるとか

▼大熊：直営がもう福岡に集中しております、福岡県の春日市、福岡市が2店舗、直営が3店舗ですね。連携店舗とフランチャイズが熊本市とか、和歌山市にもちょっと名前が変わりますけどばあちゃん酒場っていうお酒も出す店と、あとガールズ婆ってのも福岡市に、それも昼間ですけどもバーボンとか清酒、バーにかけていろいろと展開してるような

形です。直営は福岡県を中心にやっております。

▼大島：ありがとうございます。すごくわくわくする話でした。続きまして、黒岩様お願いします。



▼黒岩：こんにちは。鹿児島県から来ました黒岩と申します。よろしくお願いします。

全国小規模多機能連絡会の代表もしておりますが、今日は少しですね、居住支援の話もしていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

僕は今霧島市で特養の方にも勤務していて、あと始良市っていうところあるんですけども、桜島そばで小規模多機能を運営しています。同じく、霧島市の方で地域サポートセンターよいどこい、これも株式会社で小規模多機能を運営しております。この中に一般社団法人サツマスタっていうのを作りまして、この一般社団法人の方で主に居住支援法人の方をしています。

小規模多機能は、できた頃はですね、どうしてもその通いを中心として、泊まって、訪問もして、自宅での生活を支えるというふうに始まったんですが、やっぱりこの間にいろいろ変化をしてきました。単に通うだけじゃなくて、もっと自宅で地域でできること、或いは働くとかですね、或いはその拠点としての機能っていうのが多く求められるようになったんじゃないかなというふうに思いますし、また、医療ニーズの高い方もですね、やっぱり自宅で最期まで暮らし続けたいっていう方を支える仕組みにもなってきたんじゃないかなと、かなりこの間に変化しております。

その中で我々、僕だけじゃなくてですね、全国どこの小規模もいろんな方の出会いがあるわけですけども、例えば一番上だと要介護2の女性で2階建ての借家に住んだんですけども、長年1人で暮らして

いたが、息子さんは熊本に暮らしている、水道は1年前から止まっていて、本人の生活保護の支給日になると、息子さんが通帳からお金を引き出してしまっていると。200万以上の家賃の滞納があるとかですね、いろんな人の出会いがあるわけですね。

それで行政と繋がってうまくいくケースと、どうしようってなってお手上げ状態になるところもあるんじゃないかな。

ひとり今日ご紹介したいのが、自分からの意思で家族との縁を切られた90代の男性という方をご紹介します。身寄りのない方っていうのは周りの身内が亡くなってひとりぼっちになったりとか、もともと疎遠になってしまってひとりぼっちになる人もいますけども、この方は自分の意思で娘さんと縁を切って1人になった方ですね。奥さんがいらっしゃったんですが、奥さんが亡くなって、長女、次女と3人の生活が始まりました。この人は再再婚、3度目の結婚かな、だからこの長女と次女は奥さんの連れ子だたんですよね。これまでのことは水に流して、仲良く暮らそうというふうに長女の方は言うてくださったんですけども、それを信じて、本人は自宅へ帰宅を決意したんですが、その関係性がもともと悪かったんで、初めのうちは平穏な生活をしていたんですが、だんだん娘さんからのですね、虐待が始まったと。長女の言葉が徐々にきつくなって、まごの手や或いは手の甲での暴力が繰り返されるようになりました。地域包括や役所にも相談をするんですが、1回は聞いてくれるんですけども解決には至らなかったってことですね。

過去に本人自身仕事もしていて厚生年金も持ってらっしゃったので、それなりに財産持っていて、株を買ったりとかですね貯蓄もしていたんですけど、それを娘さんたちからすれば、責めていくと、自分だけ自由にお金を使ってみたいな形ですね、やっていたと。

さらには家庭内の虐待が深刻化して、これは平成28年ですけども、1月22日、やかんや洗面器に入れた水を背中からかけられたりとかですね、ベランダに放置というふうにされたり、或いは雪も結構その当時降ったんですけども、その雪のときにですね、もう帰ってくるなというふうに水をかけられて公園に追いやられるという状況がありました。

そこでですね、もうこれ以上帰ったら自分は殺されると思って、家を飛び出す決意をして、もうこれも90代になってからですね、その時の状況がこういうふうにあぎをいっぱい作ってですね、まずは警察に保護されてそこから養護老人ホームへ一旦入所となりました。

緊急保護と支援のスタート、まず養護老人ホームに入れたんですが、養護老人ホームもいろいろ事情があって2週間しか受け入れないということで、うちの小規模多機能へ移動してきました。

市役所より成年後見制度の提案があったんですけども、もちろん本人はですね、しっかり意思疎通もできて認知機能も低下していませんでしたので、その成年後見の対象ではないと。法的対応と生活の再構築ということで、本人さんが弁護士さんとちゃんと話をしたいという意思がありましたので、弁護士さんを僕の方で紹介して、一緒にですね、娘さんとの離縁と財産分与っていうのを進めてきました。

住宅や車・預金・保険・株などですね、それ2年かかりましたけども何とか終了です。

この間2年間は、娘さんたちも若干精神障害もあってですね、このお父さんを町中探したりとか、市役所の方に毎日押しかけて行ったりとかですね、いうこともありましたが、その点やっぱりちょっと姿をくらましてじゃないですけども、小規模中の居室でじっとしていないといけない生活が続きました。

こういう法的設立手続きが終わった途端にですね、やっぱり自分自身はもう1回地域で暮らしたいというふうに本人もおっしゃって、うちの始良市の加治木町というところあるんですけども、そこで借家を借りて、また一人暮らしを92歳でしたかね始めたところですよ。

もちろん保証人がいままので、私どもでお借りしてそれをサブリース的にお貸しするという形でスタートしています。1年半ぐらいですね、我々は小規模多機能としては、ちょっとした買い物支援であるとか、病院受診のお手伝いとかそれぐらいでしたが、穏やかに暮らしてらっしゃったんですが、急にですね、腹痛があって、入院して5日後に亡くなられております。

本人さんがですね、最後亡くなったら葬式はこの事業所でしてくれて言われてましたので、うちの

事業所の中で葬式を行っております。事業所ですとですね、多くの人が見守ってお花を上げてくれるのですね、葬儀社に行ってしまうとなかなか一緒にいた利用者も送り出すこともできませんので、葬式はうちの事業所でやっています。

死後の対応、やっぱりこうなくなっていくと、身寄りのない方は亡くなるとですね、この借家の整理返却と納骨堂への納骨、遺言の検認申し立てなど、そういうのが残っております。納骨堂はご生前ときにですね、自分でちゃんとお寺さんを決めてですね、一緒に3件ぐらい回ってここがいいということ、納骨堂も自分で買っておられましたし、遺言書は弁護士さん通じて作っておりますので、それを裁判所に持って行って検認申し立てをしたところです。

こういうことが何ケースがあって、やっぱり身寄りのない方の問題っていうのは、本人も大変かもしれませんが、支援する側も大変なんだろうなど。

そもそも身寄り問題っていうのはですね、日本って結構やっぱり家族がするのが当たり前というふうにされていて、住居・医療・介護など人生の大切な場面では、いわゆる連帯保証人であるとか、身元引受人が求められているわけです。ましていなければケアマネが保証人になったりとか、生活保護課の職員が病院で緊急連絡先に署名したりとかしてるわけです。その結果身寄りのない人や家族との関係がもが持つはずの権利を行使できない、或いは目の前に高い壁を感じてることがあるんじゃないかと。

身寄りがないためにアパートを借りれないとかですね、適正な医療が受けれないとかですね、或いは有料老人ホームに入れないとかですね、いろんな問題が生じるんじゃないかと。それがやはり身寄り問題なんじゃないかなというふうに思っています。

やっぱりこういういろいろ実践をしていくと、その理想像ですね、いわゆる身寄りで困っていない、身寄りがいらっしゃる方、ここはいいんですけども、この辺ですね、ここが一番問題になると。

実は身寄りがあるから困ってる場合もあるわけですね。身寄りはいるんですけども、その家族から虐待を受けているとかですね。或いはいろんな自分の意志でこうして、こういうふうに住らしたいとか、こういうふうに最期を迎えたいと思っても、勝手に老人ホームに入れられるとかですね、そういう

こともあるんじゃないかと。

あと身寄りがないから困らないこともある、身寄りがないんだけど、ちゃんと自分の意思を伝えられて、こうしたいんだということを周りがサポートできれば、やはりその方が自由で自分の意思が通るってのもあるんじゃないかっていうことです。

もう一方ですね、支える気持ちがある家族とですね、支えるお金、或いは時間があるところはいいんですけども、支える気持ちがあるけども、どうしてもその金銭的な余裕がないとか、時間がない方がいらっしゃいますよね。それにやっぱりご家族に対して、やっぱりキーパーソンに対して、特に我々介護事業所もやっぱりキーパーソンとしていちいち確認をとるわけですよ。或いは選択を求めるわけです。でも本人に意外と聞いてないということ多いんじゃないかな。ですから家族による支援が当たり前とする社会で支援する側の家族はさらにお金と時間という余裕あることが当たり前というふうにされてるんじゃないかな。家族によってはですね、やっぱりどうしてもそれが難しいと。そうするとどうしても虐待というふうに繋がっていくんじゃないか。その家庭の状況とかをしっかりと把握していかないと、それを無理やり押し付けてしまうことがあるんじゃないかなというふうに思います。

身寄りがないことによる課題としては大きく4つですね、連帯保証の問題と医療決定と金銭管理と死後対応ですが、このことについては、やっぱりその本人だけでなく、特にこの死後対応のところですね、いうところは、やっぱり支援する側も非常に困っているところです。結局、現状はみんなこういう課題があることに気づいていながら、誰かが解決してくれるのではないかと、やはり行政がすべきだとかですね、お見合い状態になっている場合があり、行政の中でもそっちの課なんじゃないか、いやこっちの課ではないとかですね、そういうことも起こってるんじゃないかっていうことです。

そういうこともあって、霧島市ではガイドラインを作りました。対象はですね、身寄りがない人、身寄りに頼れない人、そして身寄りに頼りたくない人、家族による支援が受けられない人、この4つを対象としてガイドラインを作成しました。

2年ぐらいかかりましたが、市役所、医師会、いろ

んな機関に入ってもらって勉強会やですね、あと委員会を通じて作っております。

身寄りが無いってのは完全に身内がいないってことなんですけども、実は探せばいるんですよ。何かこちらから連絡をすると遠方に住んでいらっしゃる、東京とか、例えば大阪に住んでいらっしゃる、でも連絡をするなど、連絡してくれるなど、二度と顔見たくない、死んでも知ったこっちゃないという家族も結構多くてですね。ですから身寄りが無いんじゃないで、身寄りがいるけど頼れないとか、或いは自分自身いろんなやっぱりこれまでの暮らしの過程があって頼りたくない人、この2つのところが特に多いです。

ここはいわゆる少年・青年・若者ですね、親御さんがお2人ですね、両親ともに急に亡くなってしまって取り残されてしまったっていう方々も結構いらっしゃいます。そういう方々も支援を受けないといけない。

我々ですね、霧島市で作ってる約束事っていうか基本的な考え方を6つ挙げています。

特に自分たちがこのガイドラインを作る過程の中で大事にしてきたのは、もちろん主役は当事者であると、身寄りが無い当事者の事前の意思表示や、繋がりと互助と備えということですね。ちゃんと本人と話をしようということ、もう1つはこのチームによる支援と役割分担ですね。結構先ほども言ったケースワーカーが抱えてるとか、ケアマネジャーが抱え込んでるとか、ある1つの事業所がその問題事例として抱え込んでしまってるケースが多くて、それを役所も通じて地域包括或いは基幹型支援センター時には生活保護の担当者、いろんな人が関わっていくことでチームとして、本人の意思をちゃんと聞いて、それをつなげられるようにしようということで、それを大事にしています。

もう1つはですね、今シェルター事業もやっています、その日の屋根っていうですね、やっぱりDVでその被害に遭われて警察に駆け込んでいく女性、非常に多いです。あとは生活困窮で路上生活、いわゆる車上生活ですね、車の中で生活をしていたりとか、公園で寝泊まりをしている方もいらっしゃいます。そういう方々に、その日の屋根、一晩ですね、

やっぱあったかい布団に入って、或いはシャワーを浴びて、或いは温かいものも食べて過ごせば、また明日からの生活っていうことを少し考えられるんじゃないかと思って、その日の屋根ということを提供しております。

これはアパートですね、1DKぐらいのアパートですが、ここだとお1人の方、或いは小さいお子さんを1人抱えた方ぐらいかなあという所ですね。

ここはですね、市役所が持っていた教員住宅なんですけど、校長住宅を昔は鹿児島県はあちこち持っていて、霧島市も持っていたんですが、そこが空き家になっていて、霧島市が我々に無償で提供して下さってます。それをシェルターとして使っています。小さいお子さんを例えば3人抱えてですね、警察逃げ込んでくる女性の方もいらっしゃいます、するとやっぱ子供が泣き叫ぶのが周りに迷惑かけるとか、それが気になるっていう方もいらっしゃるの、こういう一軒家だとやっぱりこう過ごしやすっていう。

これはもう1軒ですね、借家をこちらでも借りまして、なかなか2軒では足りない時期が多くなりました、日によってはもう3軒とも埋まっちゃったり、この前実は8月に水害があったんですが、その水害のときも、それぞれのシェルターでですね、避難をされた方もいらっしゃいます。もう裸っていうか、もう着の身着のまま来ていただければですね、もう風呂も、トイレも、もちろんタオルも、ご飯も、歯ブラシも全部ありますので、全く何も持つてくる必要ありません。例えばご飯とか或いは日常生活品ですね、トイレットペーパーとか、女性ですと生理用品、そういうものは地域の中にある、子供食堂であるとか、或いはそういう物品を提供してくれるボランティア団体がありますから、そこと連携して少しずついただいているところです。

これが令和6年度のシェルターの利用状況ですが、結構、年齢的にもですね、46歳の女性とかですね、ストーカーに遭われた方とか、或いは39歳男性の、これ刑用者ですが、窃盗で何回か捕まって出所してきたんですけども、寝る場所がない、或いはアパートが借りれないということで、シェルターを使われています。この方はですね、1年は頑張っここから居住支援につなげてアパートを紹介して、1年は頑張っって娑婆で過ごしてらっしゃいましたが、1年後は

ちゃんとですね、また刑務所に戻って行かれまして。そういう再犯はあるんですよ。でもそれがやっぱり一時的に地域に帰っていらっしゃるんで、そこをサポートしていかないといけないのかなと思っています。あとはですね、34歳女性で1歳児、男児持ちですね、いろんな方がそのシェルターを利用されています。

小規模多機能ですが、本当にいろいろ変化をしてきたって言っていますけども、まず大きく3つの機能が求められるようになってきてんじゃないかなあと思います。

まずは相談機能ですね。高齢者のこと或いは認知症のことだけではなくて、やっぱり地域にはいろんな課題があって、例えば子供たちの通学路の問題とか、ごみを捨てる場所であるとかですね、いろんな課題があります。そういうのを一旦聞いて運営推進会議の場で語っていくとかですね、そういうこともできるんじゃないかと。あと集いの場としてはですね、公民館もあちこちあるんですが、鍵を借りないといけないとか予約しないといけないとかありますので、それを地域交流スペースを使ってどんどん発信、提供していくとか、今うちの地域交流スペースでは、例えば月に1回、アレンジフラワーの教室が行われていたりとか、指ツボマッサージが行われていたりとか、定期的に地域の人がそういうふうに使ってくれることになっています。あとはもう緊急避難ですね、災害或いは虐待、先ほど言ったDV者、風呂と飯とですね、布団がありますからそんないい場所ないですよ。それを有効活用できるのは、小規模多機能かなというふうに思っています。

最近では霧島市の事例でいくと、訪問機能がもとあってあまり抵抗感もないので、子育ての世帯にも訪問を始めました。これは去年からなんですが、産後鬱で、お母さん自身が保育園に朝送っていけないとか、頭起こせないんですね、或いはご飯を作りたいけども調子が悪くて子供にご飯がつかれないとか、或いはごみをですね、どうしても溜まってしまいう特性、障害ではないんですが特性としてごみ屋敷になってしまうお母さんですね、そういうところに小規模多機能の訪問として行ってですね、お母さんしながらですけども、やっていってるケースもあります。

ます。

小規模多機能としては、これから益々いろんな可能性もあるんじゃないかなというふうに思っています。以上です。ご清聴ありがとうございました。

▼大島：ありがとうございました。小規模多機能の新たな可能性を学んだ気がいたします。また後のディスカッションでお願いします。

では続きまして、福岡市からいらっしゃいました党様、よろしくお願ひいたします。



▼党：皆さん、こんにちは。福岡市から参りました党と申します。株式会社メディアに所属しており、現在は福岡市が運営する公共施設「認知症フレンドリーセンター」のセンター長として従事しております。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日、私から皆様にお伝えしたいテーマ、あるいは鍵となる言葉は「当事者から学ぶ」という姿勢です。そのような視点で、お聞きいただければ幸いです。

私の経歴について少し触れますと、もともとは介護現場で30年近く働いておりました。高齢者施設から在宅介護まで幅広く経験しましたが、最も長く携わったのは「小規模多機能型居宅介護」です。そこで在宅支援や、高齢者の方が一人称で望む暮らしの実現、地域支援、そしてコミュニティづくりなどの実践を重ねてまいりました。

私たちは、認知症当事者の方を単に一方的な支援対象として捉えたり、サービス漬けにしたりするのではなく、「目の前のこの人が本当に求めている暮らしとは何だろうか」と問い直す必要があります。

特に認知症は、社会的な偏見やレッテルを貼られやすい側面がございます。本人は「何もわからない

人」だとひと括りにされ、本人の意思は二の次となり、周囲がその人の暮らしを決定してしまう。いわゆる「自己決定」ではなく「他己決定」で進められてきたのではないかと、という問いです。

しかし一方で、これから認知症の方はますます増えていきます。施設に入所して「帰りたい」と泣き叫ぶ人を増やすのではなく、その人が望む暮らし—例えば「これまで通りの生活を続けたい」「自宅や住み慣れた地域で暮らし続けたい」という願いが叶えられる環境を作るべきではないでしょうか。そのような思いを持って、現在、認知症フレンドリーセンターに従事しております。

人口減少はこの国の大きな課題ですが、それは同時に高齢社会への突入を意味し、今後も高齢者人口は増加し続けます。現在の医学において、認知症の最大の要因は加齢に伴う老化です。つまり、認知症とは「年齢を重ねれば誰にでも起こり得ること」なのです。一説には、90歳を過ぎると2人に1人が認知症になるとも言われています。そうした方々にレッテルを貼り、社会から排除している場合ではありません。より豊かな社会、そして当事者主体の社会を目指すなら、周囲が考え方を変えていかなければなりません。

2025年現在、軽度認知障害（MCI）の方を含めると約1,000万人いらっしゃるかと推計されています。さらに25年後の2050年を見据えると、認知症の方は1,200万人を超え、総人口は約9,500万人になると予測されています。これは国民の8人から9人に1人が認知症であることを意味します。こうした時代を想像したとき、今我々が成すべきことは何なのか、ということが問われているのです。

先ほど申し上げた通り、今回共有したいのは「当事者から学ぶ」ということです。

皆様も「ユニバーサルデザイン」という言葉をご存じかと思います。約20年前から浸透し、今や日本全国でバリアフリーが進んでいます。

しかし最近では「インクルーシブ」という言葉が注目されています。

ユニバーサルデザインは非常に立派な概念ですが、どちらかといえば「マジョリティがマイノリティに手を差し伸べ、環境を整える」という側面があります。一方でインクルーシブとは、その逆で「マイノ

リティから学ぶ」ことです。当事者から学ぶことで、マジョリティ側では想像もつかなかった新たな価値を創造する、そこが大きな鍵となります。

現在、福岡市では市政を挙げて、まちぐるみで「認知症にやさしいまち」を目指すプロジェクトを動かしています。

例えば、当事者から学びながら市内の環境をアップデートするために「認知症の人にもやさしいデザインの手引き」を作成しました。

認知症の方は単に物忘れをするだけでなく、視野が狭くなったり、立体空間認識や遠近感が掴みづらくなったり、色のコントラストが判別できなくなったりすることがあります。

例えば、ある中心部にある非常におしゃれな公共トイレがあります。しかし情報過多であるため、認知症の方にはそこがトイレだと認識しづらいのです。「MULTI PURPOSE」と書かれた多目的トイレがあっても、その意味がわからなかったり、扉と壁の色が同化していて入口が見つからなかったりします。また、天井近くに掲げられたサインは、視野が狭くなっていく方には情報として届きません。

これに対し、福岡市営地下鉄の新路線では「認知症にやさしいデザイン」を全面的に導入しています。

壁と床の色をはっきりと分けることで立体空間を認識しやすくし、目線の高さにピクトグラム（図記号）を掲示しています。これにより、記憶に頼らず直感的に目的地へ辿り着けるような工夫をしています。その他、照明の明るさや色のコントラストなど、約30ものポイントを反映させて街をアップデートしています。

専門職として長く関わってきた私自身も、かつては誤解をしていた部分がありました。例えば、認知症の方が支払いの際にエラーが増えると「計算能力が衰えたから買い物ができない」とレッテルを貼ってしまったように思います。

しかし、当事者の世界を覗いてみると、実は「小銭の大きさや色の違いがわからない」といった視覚的な課題があることがわかってきました。500円玉を出したいのに100円玉を出してしまうといった失敗が重なり、自信をなくして外出を控えるようになるのです。原因が明確であれば、それを解消するための配慮が可能です。

また、電車とホームの間が過度に怖く感じられることもあります。認知機能が低下すると、黒いマットや溝が深い穴のように見えるため、歩行が不安定になったり転倒しやすくなったりします。こうしたことを当事者から学び続けることで、私たちができる「伸びしろ」はまだまだたくさんあると実感しています。

福岡市のまちづくりにおいて大切なキーワードは、支援から「活躍」へのシフトです。当事者を一方的な保護対象とするのではなく、活躍できる機会を増やしていくことが重要です。

その鍵の一つが「働くこと」であり、企業とのコラボレーションも進んでいます。企業にとっても、認知症の世界を理解することは新たなビジネスチャンスに繋がります。

例えば料理について、周囲は安全のためにIHへの変更や配食サービスを勧めがちですが、当事者は「使い慣れた火で料理がしたい」と望むことがあります。そこでガス会社のリンナイ様、福岡市、そして弊社メディヴァが共同し、約2年かけて実証実験を繰り返しました。約100名の当事者に協力いただき、数々の製品が生み出されました。

現在、こうした思いを持つ企業は増えており、全国から130社近くが福岡市に集まり、共同開発や認知症の学習に取り組んでいます。

#### 当事者の輝きと「三方よし」

当事者の方に役割や出番があると、皆様の目は本当に生き生きと輝きます。一方的に保護の対象として扱うことは、かえって意欲や能力を奪い、自立支援とは逆の方向に向かわせてしまいます。そうではない社会を共に作っていきたいのです。

リンナイ様との開発中、当事者の方々から大きなヒントをいただきました。例えばコンロの音声案内において、当初メーカー側は「点火しました」「消火しました」という言葉を設定していましたが、おばあちゃんたちは「そんな言葉は日頃使わないからわからない」とおっしゃいました。代わりに「火がつきました」「消えました」という言葉にするよう助言をいただきました。メーカーの担当者にとっても、これは目から鱗が落ちるような発見でした。

こうした実証実験に関わっていただく当事者の方には、福岡市では最低賃金を下回らない適切な謝礼（現在は1時間1,100円程度、内容によってはそれ以上）を企業からお支払いいただいています。これは単なるボランティアではなく、一足先に認知症になられた「人生の先輩」から学ぶ知見に、高い価値を見出しているからです。

介護の専門職が持つノウハウは、社会全体にとって極めて価値のある財産です。事業所内だけで完結するのではなく、その知見を地域や社会へフィードバックしていくことで、人々の捉え方は変わっていきます。

「何もできない人」ではなく「笑顔で地域に貢献できる人」として輝くプロセスを、専門職だけでなく地域住民や企業の方々と共に分かち合う。そして、当事者よし、家族よし、社会よしの「三方よし」の世界を作っていく、そこに大きな伸びしろがあると考えております。

結びに代えて、最後に、お伝えしたいことを3つにまとめます。

上から目線の「保護対象」ではなく、マイノリティとしての「かけがえのない価値」を尊重し、学ぶ姿勢を持つこと。

そのためには本人としっかり向き合い、共に歩む関係性を築くこと。介護事業所は単なるケアの場ではなく、新たな価値を創造する場として「地域アウトプット型」へと変容していくこと。

他力本願ではなく、まずは私たち実践者がやってみること。失敗を恐れず、スモールステップでコツコツと積み重ねていけば、きっと芽吹くものがあるはずです。

せつかくの機会ですので、ぜひ明日からの実践を、小さな一歩から変えていただければと思います。

私からの発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

▼大島：ありがとうございました。当事者から学ぶという具体例、ガス台で本当によくわかりました。また後程よろしく願います。それでは最後になりますが、高知県の森田様お願いいたします。



▼森田：高知県から来ました、あつたかふれあいセンターのコーディネーターの森田です。高知から車で昨日出て7時間半かかりました。四国なので、なかなか交通の便が悪くて時間かかってしまいましたけど、石川県すごくいいところなので、堪能したいなどと思っています。今日はよろしく願います。

私も大熊さんの言ったことと同じような形で介護の仕事は全くしたことがなくて、本当いち住民としてこのあつたかふれあいセンターにかかわらせてもらっています。今日は高知型福祉である、あつたかふれあいセンター。これは高知県しかないものです。その活動を中心にお話をさせていただきます。よろしく願います。

高知県は東から西までがすごく長くて、高速の整備もまだ進んでないところもありまして、東の室戸市から西の土佐清水市まで5、6時間かかります。

私たちが活動してる佐川町は中山間地域なんですけども、中心部の高知市から車で西へ約30キロぐらいの場所にあります。令和7年の3月末の人口は11,606人。私が仕事を始めたときは13,000人ぐらいありましたのでどんどん減ってきています。高齢化率は41.9%です。後期高齢者75歳以上が2,914人で、高齢者の約6割が75歳以上という町です。

高知県はこのグラフを見てもらえばわかるように全国に先行して高齢化が進んでいて高齢化で言えば先進地と言われてます。人生100年時代と言われている昨今、高齢者の人口は右肩上がりに増加。介護

ニーズはますます増えて、反対に生産人口は右肩下がりです。地域の担い手は急速に減少し、今後地域での繋がりや支え合いが重要になってきます。

そこで高知県に整備されたのがあつたかふれあいセンターです。平成21年度からはふるさと雇用再生特別交付金という国の補助金を活用して、雇用目的でももとは始まった事業ですが、23年度にその事業が終わってしまいました。そうするとやっぱり事業を閉めてしまうとかやめてしまう地域が多かったです。高知県は前知事の尾崎正直さん、今の官房副長官の尾崎さんが高知県の知事だったときに、高知県には絶対この事業は必要ということで、肝いりで始めまして、平成24年度からは高知県の単独の補助事業となり県と市町村半々の補助金で運営をされています。高知県は日本一の健康長寿県構想というのを平成28年から掲げておりまして、実現のためにもあつたかふれあいセンター事業は不可欠です。

現在は31市町村55拠点、ちょっと右の見えづらい地図ですけど、3ヶ所だけ薄い黄緑ですね、ここがやってない市町村です。中心の高知市、あと梶原町、香南市この3ヶ所がやっていないだけで、あとは全市町村やっている事業です。社会福祉協議会さんが受託して運営しているセンターは7割。佐川町はNPO法人や地域住民組織で運営をしています。介護保険サービスとインフォーマルであるあつたかふれあいセンターを併用して利用されている方も多いです。

あつたかふれあいセンターとは何ぞやということなんですが、中山間地域が多い高知県では、子供、障害者、高齢者というふうに縦割りでサービスを分けることは、人員も予算もすごく難しいです。あつたかふれあいセンターは、子供から高齢者まで誰もが気軽に集い必要な支援を受けることができる拠点の整備、そして地域のニーズや実情に応じた小規模多機能支援の拠点。職員がお世話をするという、一方方向の支援ではなくて地域の方がお互いを見守り支え合う活動そのものを支援する場というふうになっています。

私が勤務しているあつたかふれあいセンターとかのという場所なんですが、これ佐川町の地図です。斗賀野地区というところにありまして、佐川町は平成の合併がなかったの、昭和の合併で旧村5地区

に分かれています。中心地の佐川そして加茂、黒岩、尾川、斗賀野という5地区にすべてにあったかふれあいセンターの拠点が整備されています。町南部に位置する斗賀野地区は、今年3月末時点では人口が2,965人、3,000人を切っています。高齢化率が42.1%、後期高齢者が714人となっていて、佐川町の人口の四分の1がこの斗賀野で暮らしています。半分が佐川地区、中心地で暮らしているというような地域です。私たちNPO法人なんですが、ここでなぜNPO法人とかの元気村があったかふれあいセンターを受託することになったのかを少しお話をしたいと思います。

あったかふれあいセンターとかの母体である、NPO法人とかの元気村は、1990年に農地の圃場整備から端を発した組織で、2002年に現況の前身となる斗賀野里づくり懇話会という組織が立ち上がりまして、2005年に法人格NPOになり、とかの元気村が誕生しました。農業や自然環境保護など当初、男性会員がとても多い組織でした。法人化してからは、公園や山の管理などの様々な指定管理事業。これが原資というか資金になっています。これを受けて、地域の核となる組織となっていきました。ある時に地域住民の方から、みんなが集まれる場所が欲しいという声が上がりました。また農業自然環境保全だけでなく、今からは健康福祉とか地域づくりにも取り組んでいきたいという意見が理事や会員の中からあり、あったかふれあいセンター事業の運営に手を挙げたという経緯があります。地域住民の思いが形になって世代を超えてたくさんの方が集まる拠点となっています。

これがあったかふれあいセンターの実施機能です。ピンクで囲ってあるのが必須機能というものでして、必ず実施をしてくださいと高知県の方から言われている機能です。集う、訪問、生活支援、相談、つながりこの5つは必須です。とかのではクリーム色で囲ってある預かる、送る、交わる、学ぶという機能がありまして、これは余力があれば実施してくださいという付加機能です。その他の地域では働く、泊まるという機能をやっているあったかふれあいセンターもあります。拡充機能としては利用者の買い物や通院などを支援する移手段の確保や介護予防、認知症カフェなども実施をしています。

ここで写真を交えて紹介したいと思います。これが必須機能の集いの様子ですが、毎日大体40名前後の方が利用をされていて、男性利用者も多く、左上の写真のように朝早くには男性が集まってコーヒーを飲んでおしゃべりをするというような場面も見られます。男性は利用者全体の3割を超えています。平日の4時までの利用時間ですので高齢者の方の利用が多いですが放課後や長期の休みのときには小学生も利用しています。右上の写真です。コタツのところで小学生が勉強したり、右下のように、おばあちゃんと子供さんがオセロで遊んでるような、こういうほっこりした場面が見られるのも、小規模多機能のあったかならではだと思ってます。多世代が利用する場というだけではなくて、利用者が地域の情報を伝えてくれるという大事な役割を担っています。

これは必須機能の訪問です。どうしても集いに来るのが嫌な方や、人の中に出たくないという方が一定数います。その方のお宅の方には訪問しまして、元気かね、困ったことないかねと声をかけに行っています。その中で相談を受けることがあります。何度も訪問に行く中で、利用者さんの変化に気づいて、この方は介護とか医療、あと福祉面の介助が必要なんじゃないかと判断した場合は、地域包括支援センターや社協につなぐという役割も担っています。

あと学ぶという機能があります。町の保健師・薬剤師などの専門職が月に1回健康や薬、運動に関するミニ講座を開催してくれたり、ホームセンターの方を講師に防災意識を高めたり、地域の方のやりたい事をすごく大事にしていますので、地域の方が講師になってクラフトバックづくりなども行っています。

あとは交流ですね、交わりという機能です。定期的に地域の保育園児、小学生、他の地区のあったかふれあいセンターの利用者、そして小規模多機能の施設でぶらっとホーム佐川という施設があるんですが、地域にある施設の方とも交流をしようということで、右下の写真はポッチャで交流をしているときの写真です。イベントでは本当にボランティアさんとか地域の方がたくさん関わってくれて、世代を超えたイベントを企画することで、いろんな方が参加をしてくれるようになっています。

あと、とかのがやっている機能では、移手段の確保、これは無料で行っています。近くにスーパー

がない地区ですので、買い物や病院の通院、散髪、ATMにお金をおろしに行きたいなど外出支援を行っています。斗賀野地区には買い物する場所がなくて、中心地の佐川地区にあるスーパーに行ったり、病院に無料で送迎をして、利用者の方には大変喜ばれています。

あと生活支援という機能があります。簡単な困りごと例えば電球の交換とかごみ出しとかそういうものは無料で職員が行っていますが、窓拭きとか換気扇の掃除など職員が利用者さんのお宅に伺ってする、一定時間や労力のかかるものは、1時間1コインの500円をいただいて、支援をしています。ヘルパーさんではできない大掃除的な部分です。高齢になると、高い場所の掃除などはできないけれども気になる。1回でも構わないので1年に1回綺麗にしたい。そういう箇所、介護保険のはざまな部分を支援することでもっとも喜ばれています。ただ、あったかふれあいセンターとかのは私を入れて4人のスタッフで運営をしているので、だんだん全てのニーズに対応ができなくなってきていました。そこで考えたのが、平成29年度から実施している生活支援イベントのお助け大作戦です。今年で8回目になりました。まずこのイベントを開催することになったきっかけですが、さきほどお話しした生活支援の依頼が増えてきて、スタッフでは対応することがまず難しくなってきたことに加えて、ボランティアの登録をしてきてる方がその時40人ぐらいいたんですけど、いつも同じ人ばかりへの依頼になって、皆さんに役割を持ってもらうことができていないという現状がありました。そこであったかに依頼のあるそういう生活支援のニーズを1日のイベントでやってみたらどうだろうという発想がうまれました。社協が開催していた災害ボランティアセンターをヒントにさせていただきました。

目的ですが、石川県でも、能登半島地震で大変な被害にあわれたと思いますが、高知県も南海トラフ地震が目前に来ると言われています。今後起こりうる大震災などの災害や高齢化率45%、50%に備えて、日頃からの繋がりを強くしたいという思い、そして地域で地域のニーズを解消する我が事、丸ごと、お互い様という意識を醸成したいとの思いで始めました。

まずはあったか利用者で独居高齢者世帯、あと障害の方、認知症の方、MCIの方、そして民生委員さんからの依頼があったお宅に訪問して、どんなことに困っているかとか、どういった支援が必要なのかというニーズ調査をしました。毎年10件ぐらいの依頼があります。今年は12件の依頼がありました。支援箇所は草刈とか換気扇の掃除、窓拭きというやっぱり制度のはざまのヘルパーさんではできない依頼が多いです。ボランティアの募集は、ボランティアスタッフや民生児童委員、自治会、自主防災組織の代表者にチラシを郵送したり、広報の方に全戸配布でボランティア募集のチラシを入れて、地域住民全体への参加を呼びかけています。

また大学生や高校生など学生の参加も、近年ではあります。これは、当日の様子です。受け付けをして各班のリーダーさんへ説明して、班で打ち合わせをして現地へ向かいます。現地へは役場の職員や、保健師さんが救護車で巡回をしてボランティアさんの方に水分補給の声かけなどをしてくれています。今年は小学生のちびっこボランティアから最高齢88歳のボランティアまで参加がありました。やっぱり役割があるってすごく元気でいられるんだなと思います。この人材が斗賀野地区の宝だなと私は思っています。

これ左が支援する前、支援した後です。すごく綺麗になってるでしょう、沢山の方の支援で1時間~1時間半でこんなに綺麗になります。1人ではなかなかここまでできないです。これもそうですね。下は、本当にゴミ屋敷のようになってますが、民生児童委員さんからつながれた4代のお母さんと障害の子供さんが住んでるうちだったんですが外に2トントラック3車ぐらいのごみがたくさんあって、大変だったんです。でも支援した次の日に見に行ったら綺麗に洗濯物が干してあってすごくうれしかったです。お助け大作戦は本当にまさに地域共生の形ということで、ボランティアさんだけではなくいろんな方に協力してもらってできたイベントです。今年度は94名の方が関わってできました。本当にありがたいと思っています。

イベント後に必ずアンケートをとるようにしています。参加者のアンケートでは、1つの助け合いが大きなものになると気づかされたとか、ボランティ

ア同士の交流があってよかった。子供ボランティアさんは人助けをすると、みんなが笑顔になる。こういう嬉しい意見もありました。本当にやってよかったなと思います。このイベントでの成果ですが、参加した人が気持ちよく楽しくつながるということが成果だと私は思っています。困っている高齢者を支援するということが目的ではなくて、ボランティアとして参加した方がいろんな人と知り合って繋がる、そして人に感謝されることで、ボランティアっていいな。またこれくらいのことやったらやりたいなという気持ちになって、その輪が地域全体に広がったら、すばらしい地域になっていくなと感じたイベントです。この取り組みは佐川地区や加茂地区など町内の他の地区にも広がっていきまして、さらには県外の兵庫県の新温泉町の方にも広がっています。つながりの輪が各地に広がっていることは、私にとってもすごく嬉しいことです。とは言ってももちろんすべてが順風満帆ではありません。

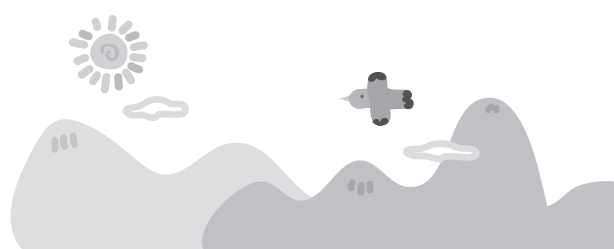
現在抱える課題としては1つ目に、多様化、複雑化する地域ニーズへの対応です。高齢者の単独世帯の増加や、認知症高齢者、MCI、生活困窮者、80・50、次は90・60問題など対象者が広がっています。介護保険や生活困窮者支援制度と連携しながら、柔軟な対応を図る必要があったかふれあいセンターとしてもあります。

2つ目に、運営基盤と福祉人材です。ここは本当に皆さん悩まれてるところだと思いますけれども、地域住民主体の運営なのでボランティアさんの関与が大きい一方で、社会福祉協議会が受託しているあったかふれあいセンターに比べて、私たちのように法人か、任意団体が受託している場合は、職員の福利厚生とか給与体系になかなか不安定な面もありまして、職員の離職や福祉人材の確保が難しいというのが高知県の現状です。

最後にあったかふれあいセンターとかの今後の展望、目指す姿はともに支え合いながら安心して自分らしく暮らせる地域づくりです。この仕事をしていて実感したことは、人とつながりがある人や、役割がある人は元気でいられるということです。人間の究極の幸せは人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人から必要とされることだそうです。4つとも決して1人では得られない幸

せの形です。お互いが頼って、頼られることで支え合いの気持ち生まれます。できることは人それぞれ違います。私も違いますし皆さんも違いますが、一人ひとりが自分のできることを少しずつ出し合っ、お互いさまの気持ちでつながっていくことで、よりよい地域づくりができていくのではないかと思います。NPOならではの柔軟性を生かして、制度の枠にとらわれない、地域に根差した活動を、今後も続けていきたいと思っています。これからも、それぞれの場所から幸せなつながりの輪が広がっていくことを祈念しまして、今日の話を終ります。

ご清聴ありがとうございました。



▼大島：ありがとうございます。4名の方のお話を伺って、それぞれにいっぱい聞きたいことあって、会場の皆さんも聞かれないと思うんですが、時間の関係があります。私が代わりにいくつか聞いていきたいと思います。

まず大熊さん。もう少し事業の中身ですね、新聞とか、ばあちゃん飯がどんな仕組みなのか、それから喫茶店ですけど、そのばあさんがやってくれるっていうことを売りにして、そこに期待して、なんていうか、お客さんが来ているのか。それとも本当の普通の喫茶店みたいなイメージでこられてるのかとか、そこら辺ちょっと教えていただけますか。



▼大熊：そうですね、店ごとに私たち、コンセプトがやっぱり強くて、かつ、申し訳ないけど全然福祉とかそういうのではないんですよ。ビジネスなんですよ。おばあちゃん好きな人を、究極までにそこをお客さんとマッチさせて、付加価値を上げて、何かおばあちゃんたちを助けてあげようっていう人たちが来てるわけじゃないです。おばあちゃんのその作った手料理を、もうやっぱなくなってきてますので、今なんて言ったらいいですかね、対極にいるのはファストフード店とか、工場で作られたものを温めて出すとかと違う「食」も求められているという、おばあちゃんの手料理を食べたいっていうのをニーズにマッチさせているような流れです。党さんのお話にあったのも近いんですけど、決して弱みじゃないとそれを強みに変えて、収益を上げるみたいな考え方でやっております。

です。福祉の視点というより町の営みに人が寄集まってきて、確かに結果的に福祉のその機能にもなってるんだけど、我々は中心に置いているのはビジネスです。おばあちゃんたちとともに稼ごう

っていうことです。

▼大島：喫茶店では、そのばあさんの喫茶店みたいな看板が出ているから、一応行く人は、ここはもうばあさんのあれなんだとわかるわけですね。

▼大熊：そうですそうです。多数メディアとかにも出て、私たち自身もメディアを使います。発信数を1日50回とか、広報活動をSNSで展開してますので、もうわかった上で来ております、お客様。もちろん一部突然訪れる方もいらっしゃいますけれども、基本的にはおばあちゃんの食事だったり、あと交流を、これは一定数いるんですよ。一定数、いやかなりいます。おばあちゃんに癒されたいとか、おばあちゃんとコミュニケーションをとりたいっていう経営者の方とか、そういった方々、専門職とはまた違う一般の方ですね。こういった方々を集めておりますお客様として。

▼大島：ちょっと前にNHKで中井貴一さんが出た母の待つ里という、他人のおばあさんが家族のように癒してくれるというシチュエーションのドラマがありました。また、群馬県に南牧村という日本最高の高齢化率の自治体がありますが、そこでもばあさんだけでサービスを提供する宿が企画されていると聞いたことがあります。リピーターを前提にしてですね、ばあさんが来て何とかちゃんよく来たね、いやいや、とか言って、そのつながりも作りながらばあさんがサービスしてくれると。

▼大熊：完全に同じです。なので、推しのばあちゃんとか、お客さんの中にはやっぱりいるみたいで、おばあちゃんにファンがついてます。

▼大島：ありがとうございます。それから、黒岩さんにお尋ねしたかったのは、お聞きしていて、市役所の福祉部局や地域包括支援センターがやるような仕事を、民間ベースで率先的にやっていらっしゃる感じもしました。そこで、収支というか、お金がその委託費みたいのが来てるのか、それとも小規模多機能なりやっていらっしゃるその分で職員の方の人員費カバーされてるのか、そこら辺をちょっと教えていただけませんかでしょうか。

▼黒岩：よく聞かれるんですけどその居住支援に関して知りたいんですけど、全く赤字でですね。国交省から若干補助金っていうかあるんですけども、これも何か、年によって違ったりして、今年度いただけるのは58万だったかな。年間それぐらいですね。あとはもう赤い羽根の募金がもらえたらラッキーみたいな感じで、職員っていうのはもう小規模多機能の兼務職員で、例えばシェルターを出られた後に清掃しないといけないので、そういう清掃するとか、或いは警察から連れてこられた方をシェルターに案内するとか、あと居住支援だと、その居住支援でこちらが関わった方には、月に1回訪問して様子を伺ったりもしますので、そういうところは、うちのサツマスタで雇用している人は、パートが1人だけであとはもう小規模のスタッフが兼務でいろいろやっていたけるっていうか、あとは僕が動いたりとかずっとしてますね。

▼大島：黒岩さん自身は多分そういう理念で、当然自分のことで納得してらっしゃると思うんですが、スタッフの方についてこられるんですか。

▼黒岩：おかげさまでですね、職員さんもですね、すごく車上生活をされて、突然、生活福祉課とか来てもですね、例えば今夕方だから、もうご飯もないんじゃないつったら、職員さんがちゃんと作ってくれて、そのアパートに届けてくれたりですね。非常にうちの職員さんも理解あってやってくれています。だから認知症の介護をするところが小規模多機能じゃなくて、我々は福祉という観点で仕事をしてるんだっていうのは感じてくれてるんじゃないかなっていうふうに思います。

▼大島：単にたまたま小規模多機能っていう殻を使ってるっていうだけで、やってらっしゃることはまさに地域支援というか、生活困窮者支援を民間目線でやっているっていうことですね。

▼黒岩：多分行政にできないこともたくさんありますよね。民間にしかできないこともやっぱりあって、だからそこをお互いわかり合って協力し合うと、それでいろんなことできるのかな。でもやっぱりどうしてもそういうのがうまくかみ合わなくて、行政に押し付けていたりとか、或いは民間はシャットアウトして、いやお金にならないからやらないとか、いうところが多いんじゃないかなと思いますけども、

それをお互い協力し合っていくと、自然とお互いが過ごしやすいまちっていうのができてくるんじゃないかなあというふうに思ってます。それはもちろん時間かかるんですけど、おかげさまで霧島市はそういう理解ができてるんじゃないかなと思っています。

▼大島：普通にガイドラインを作ってるしやるし、市行政ともすごく緊密に関係を作ってるしやると思うんですけど、一步踏み越えて市の方から委託費出してあげますよとかいうふうにはならない？

▼黒岩：そうですね。結局、担当課がどこかっているのがお互いこれ押し付け合ってるんですよ。生活福祉課なのか、或いは障害をお持ちで、生活困窮の人もあるし、或いは療育を必要の子供さんを抱えてる家庭もあったり、或いは高齢は高齢ですよ。だから、どこが担当するかっていうのはなくて、ガイドライン作る時も結構これ揉めてですね。だから結果、一つ残念だったのは霧島市としてのガイドラインになってなくてですね。ガイドライン策定委員会が発行したガイドラインになってるんですよ。そういう意味ではちょっと最終的にはあれでしたけども、そこでも皆さんの課長クラスの方は委員会とか協力をしてくださった。でも自分とこで抱えて主管にはなりたくないっていうのは感じました。

▼大島：ありがとうございます。党さんですね。この福岡市が運営するっていう、まず私、エツと思ったんですが、多分市の行政の柱にその認知症フレンドリーっていう市行政の目標を掲げられたから、市がやり出すってことになったと思うんですけど。そこら辺の経緯ですとか、さらには具体的に認知症フレンドリーシティなり、そのコミュニティー作る際にやるべきことと内容が、多分最初は駅とか公共施設のところから始まってって、だんだんとその企業の製品開発まで繋がっていったのかなと思うんですが、そこら辺の経過といいますか経緯をちょっと教えていただけますか。

▼党：福岡市の認知症にやさしいまち、すなわち認知症フレンドリーシティプロジェクトっていう施策が実は7年前から引かれてやっております。人生100年時代なので、それを見据えた上で、健康的にその人らしくみたいところで、市長、首長のトップダウンで政策が動いてる。7年前から動いてるのは3つの柱があったんです。

1つ目はユマニチュードっていう、認知症ケアの技法があるんですね。関わり方のテクニックを学ぶ技法があります。あまりこう皆さんに知られていないんですけども、ユマニチュードをきっかけにして、多くの市民が関心を持てる社会をつくろうとやってるんですよ。やっぱ飛び抜けてるなと思うのは、例えば認知症サポーター養成講座って、今全国で展開されてますが認知症サポートと抱き合わせとか、ユマニチュード独自だったり様々なんですけど、本当地域にアウトリーチして、住民向けだったりとか、最近ではその企業向けとかですね、小学生、150校近くある小学校あるんですけども、すべての小学4年生に総合学習で入れ込んだりとか、今年度からは中学1年生の子たちにも授業として入れ込んでます。

やっぱ20年後、30年後を見据えてるんですよ。この子たちが大人になったときの社会で考えるとって、認知症って結構コミュニケーションエラーがやっぱり大きいんですよ。どう関わっていいかわからないとか、同じ事何回も何回も言われてイライラしたりとかですね、いろんなことがあるので、認知症のことを理解していきながら、自分自身がどう向き合ったらいいかっていうメソッドを、すごくわかりやすく教えてるものがあるんで、それを市民160万人都市なんですけど、160万人に知ってもらおうというところでやっているのが1つ。

2つ目の施策が先ほどご紹介しました認知症にやさしいデザインなんですね。空間認識、視覚のエラーとかが出てくるので、それを解釈していきながら、公共施設を中心に今広げていってます。地下鉄の全線だったりとか公民館とかあと区役所の建て替えとかってのは全面的に入れてます。福岡は公衆トイレが日本一多いらしいです。屋台町なんです。多いということで公衆トイレも結構広げてますよってところで、環境を認知症にフィットさせていってる。しかしながら、福岡市はそこまで言わないですが、やっぱデザインの力っておっきいなと思って、多分それってしれっと入れてるんですよ。認知症にやさしいデザイン入れてますっていうのは全然うたってなくて、しれっと入れてるんです。何だかこの路線って使いやすいなっていう市民の方がいらっしゃるんですけども、実はそれって入ってるんだったら結構衝撃を受けるんですよ。そういったところに配

慮してるんだねとか、そういったことが必要なんだっていうことに気づければ、次のアプローチに変わってくるというところで、デザインってのはすごく何かこう期待値がおっきいななんていうふうに思っております。

3つ目はリンナイで紹介しました、認知症の人が認知症の人にもやさしい製品サービスの開発の枠組み。オレンジパートナーズっていう枠組みを作ってます。それと掛ける認知症の当事者が参画できるオレンジ人材バンクっていう人材バンクを作ってます。人材バンクには多くの認知症当事者の方々が自分の意思で入ってます。人の役に立ちたいとか、何かできることをしたいとか、お金を稼ぎたいとか、そういった思いがあって入られて、この掛け算をするんですね。認知症の世界を知らない企業は認知症の人から世界を学ぶんです。この人たちが考えてること、求めているもの、そういったものをどんどんどんどん生の声で聞かせてもらい、一緒に行動することによって、アプローチの角度が粒度が変わってくるというところで、3つやっています。

7年前からやってきてずっと、あいだにコロナを挟みましたが、一定手応えがあったんですね。それをより強固にしっかりと情報発信拠点として、やっぱり拠点が必要だろうというところで、フレンドリーセンターが一昨年オープンしたよう、要は僕らのタスクは何かって言ったら、市民が抱えている社会に横たわっている認知症の負のイメージを覆していくっていうところがミッションなんです。

ただ、認知症、認知症ってずっと言ってますが、今日のこのテーマもあるかもしれませんが、認知症を入口にしていきながら、やっぱりその障害の方であったりとか、いわゆるマイノリティの方であったりとか、それらの方々にも関心を向けられる社会を、それらの人と一緒に作ろうというところで今動きをとっているという話になります。すいません話が長くなって脱線したかもしれませんが、以上です。  
▼大島：いえいえ、どうもありがとうございます。よくわかりました。本当に日本の中でそういうおっきな都市が、政令市がやってらっしゃると本当にいいこと、ありがたいことだと思います。

あったかですね。森田さん3年間の交付金が終わって、そのあと、県単、市単で続けたっていう、もう本当にすばらしい。多分中身がそれなりに反響があったから、そこまでしてでもやっていこうということだったと思うんですけど。是非、こういった取り組みを今後どんどん人口減少進みますので、それぞれの都道府県に応じた形で、こういう住民共助型で、いろんなニーズに対応できる柔軟性があるサービスも必要かなと思うんですが、聞いていてちょっと思ったのは、まず旧村というか町の4ヶ所にあるってことなんですけど、そこまでに行く、行き方というか、歩いていくのか、自転車でいくのかといった話と、それと男性が午前中やってくるっていうなぜ男が来るのかですねここをちょっと教えてください。

▼森田：旧村単位で5地区にすべてあったかふれあいセンターがありますが、佐川町は100平方キロメートルぐらいの面積の町になります。5地区にあったかふれあいセンターがそれぞれあることによって、もちろん歩いてこられる方もおりますし、軽トラとか車を使ってくるおじいちゃんたちもおりますし、送迎という機能があります。全部のあったかが送迎機能を無料で行っていますので、自宅の庭先からセンターまで送迎で来られる。特に、高齢の女性の方はもともと免許証持っていない方が多いので、送迎が多いのは女性が多いです。元気なおじいちゃんたちは畑仕事をしながら、ぶらっと軽トラで来られてコーヒー飲んでおしゃべりしてぶらっと変えられるっていうところで、先ほどの男性の利用者が多いのは、そんなに縛られない時間を、例えばデイサービスとかだとお迎えに来ていただいて、ちょっといろいろ過ごしてゲームをしたり、入浴をしたり食事を食べて、また夕方までっていう時間がある程度決まっていますよね。そういうのではなくて、本当に自由に出入りができるっていう拠点なので、おじいさんたちはもう来てお友達とかと一緒に話したら、1時間半か2時間ぐらいで帰られます。なので、縛りが無いというところが一番男性の利用者が多いのが特徴なのかなと思っています。

▼大島：送迎があるってのはちょっとびっくりしたんですけど、先ほどのお助け隊40名の方が送迎されてらっしゃるんですか。

▼森田：送迎は、私達職員4名とあとボランティアで、送迎ボランティアさんが、この方たち無償なんですけど、3人から4人おりまして、私たちがどうしても対応できないときには、車が3台しか、軽自動車2台、普通車が1台のこの3台で送迎を結構何回も何回もしなくてはいけないんですけども、対応をさせてもらってます。

▼大島：送迎の対象になる方は例えば週に1回とか、頻度的にはそんな感じになるんですか。

▼森田：毎日来てる方もおりまして、そこもデイサービスと違って介護保険ではないので、対応が毎日来たい方は毎日来れるし、週2回の方は、例えばデイサービスを3日行ってるから間の2回を来たいという方は週に2回であったり、本当にその方に合わせた対応をしているのがあったかふれあいセンターかなと思います。

▼大島：昼ご飯もあるんでしょうか。

▼森田：昼ご飯も私たちが作ったりじゃなくて、ボランティアさんが作ってくれるときもありますし、地域の方でお弁当を作ってくれる女性の方がいまして、注文を前の日に取ってお弁当を配食していただいて、家でなかなかこっちに出てこられない方には私たちが配食するというサービスをしています。もう本当にいろんな機能を、もう高知県独自でも、本当にいろんなことをせんと間に合わない感じです。

▼大島：これ、毎日森田さんがどうやって差配するか、めっちゃめっちゃ難しいじゃないですか。

▼森田：そうですね。スタッフと悩みながら、ただすごく楽しいなと思っているのは、決まったことが、皆さんもそう思うんですけど毎日がこう違うことが起こるので、楽しみながらですね、いろんな問題とかいろんな利用者さんもいますし、利用者さん同士のトラブルであったりさっきの認知症の話じゃないですけど、辛辣な言葉を認知症の方に浴びせてしまうような利用者さんもいたりとか。本当に日々、いろんな課題はあるんですけど、それも住民さんと一緒に楽しく解決しながら、冗談も言いながら毎日やっているような状態です。

▼大島：それだけどもやっぱり職員の確保っていうのは、ちょっと課題があって、やっぱり処遇面ですか。

▼森田：処遇面だと思います。やっぱり福祉人材今ちょっと金額の方も国も上げてきているっていうの

は聞いてるんですが、やっぱり働き盛りの男性は難しい。なので、私たちのように仕事をしている主人がいて、この仕事だったらというぐらいのお給料で頑張れる人ではないと難しいので、若い方だったりとか男性が入っているところは、社会福祉協議会が先ほど7割受託をしてるって言ったと思うんですが、社協さんの中であつたかふれあいセンター事業として受けているところは社協の職員なので、もうちょっと手厚いとは思いますが、やっぱり法人だったり任意団体のところはすごくそういう面では厳しいと思います。

▼大島：金額は聞いてませんが、2倍は出してあげたいという気持ちがあります。

▼森田：ありがとうございます。

▼大島：そうですね。すいませんなんか時間があつというまに、私的には過ぎた感じなんですけど、それぞれの方から一言、ふたこと、みことぐらいですね、何か自分のこれからの気持ちとか、或いは会場に全国から石川県だけでなく、他の自治体から来られますので、行政、そういう生活支援やってる方々向けに何か、メッセージありましたらお願いいたします。

▼大熊：そうですね。僕の役割、今回共生とはすなわち、多分福祉とか専門職の人たちがやることじゃないと我々ビジネスサイド、民間ですよ、民間一般人が、すいません、これ僕から見た視点にはなるんですけど、やっぱりそこで固まっちゃってると僕は思うんですよ。一般人から見ると、一生懸命専門職の方とか、福祉職の方は動かれ、考え、いろいろやってるけど、一般人の僕らにはやっぱりなかなか、知られてないという部分は、もう大いにあると思っておりますので、今日僕はお話しませんでしたけど福岡市、党さんたちがやっぱ僕らみたいな、本来福祉とは関係のないはずで、たまたまばあちゃんビジネスってのはやっていますけど、福岡市がそうやってそういうお考えのもとやってる。僕もオレンジパートナーズの一部なんです。入っていて、そこでやはり小規模多機能の事業者さんと出会って、認知症のことを初めて知って、これは解決しないといけないよねって僕らも動き出したんですよ。なのでほんとの共生っていうのは、そういうことなんじゃないかなと思います。いろんな考え領域も違うものたちが、

議論しながらとかお互いの領域で発揮しながら、何か課題を解決したりとか、ともにぶつかりながらもやってくみたいところは感じてますので、僕は全然福祉はやってないし、これからもやるっていう話じゃないけど、ここに一般市民、一般企業として入っていきなきゃなと思ってます。そういう企業が増えてくべきじゃないかなと、どっちかといったら、結構僕は特異な存在というか、どっちにも属していると。ビジネスをがんがんやるけれども、やっぱり決しておばあちゃんたちとやること自体で大きな利益を上げるわけじゃないけれどもやる必要があるっていうところでやってるので、どんどんそういう企業が参入して、ありきたりかもしれないですけど社会の地域の課題を解決していこうぜっていうビジネスマンたちがどんどん入ってくるべきじゃないかなと思っております。そのきっかけになればなと思って、全国に広げていければと思ってます。ありがとうございます。

▼黒岩：本日はありがとうございました。貴重な時間を、そうですね、僕もやっぱり、長年託老所から小規模多機能の仕事をしていまして、何か自分たちでやることっていうのは、その都度その都度、目の前のお年寄りがとか、出会った人が教えてくれるっていうかですねやるべきことをですね、だから制度追っかけるつもりはもう全然なくてですね。出会った人に必要なことを自分たちがやっていって、そこで一緒に生きてるっていう感じなので、大熊さんじゃないですけど僕らもあんまりこう共生という冠をつけてますけども、共生っていうことは意識したことなくてですね。一緒に生きるから時に助け合ったり、或いは助けられたりしてますので、まずそういう活動が今の小規模多機能だったり、活動なのかなというふうに思ってますし、やっぱり行政と介護事業者だけで考えていく中では、もう非常に限界があるのかなあと思ってます。会議にしても何にしてもやっぱりこういう大熊さんとか、民間の企業の方々、一般の方々が、普通の暮らしとしてやっぱこう疑問持ったりとか、あと一緒に考えていくことが、普通の暮らしを展開できるんじゃないかなというふうに感じています。今日はありがとうございました。

▼党：今日は貴重な機会いただきありがとうございます。言いたいことは黒岩さん全部言ったという落ちなんです、やっぱりずっと語り合ってきたのは、やっぱりそこなんですよねって。共生社会の実現のために仕事してるわけでは私たちはなかった。やっぱその目の前の利用者が求めるものであったりとか、可能性とか展望みたいなのと一緒を考え合うことによって、何か生まれたりとか何かイノベーションで起きたりとかですね、そういったところがあったんだということ。今日改めて振り返ることができました。小規模多機能がやりたくってやってるわけではないんです。やっぱ今日皆さんと共有したいのは、目的と手段の話です。サービスを提供するのはあくまでも手段なんです。目的は何かって言ったら、今日お話もありましたけども、やっぱ幸福追求だったりするんじゃないかなって。目の前の人の幸福追求と一緒にやっていくことによって、ひいては自分たちの未来にも精通してくることになってくると思うし、やっぱ何か多分人がいなくて大変とかですね、仕事忙しいとかっていろいろあると思うんですが、ちょっととらえ方とか角度を変えることによって視座を変えると、何か見えなかった景色ってまた見えてくるんじゃないかなって思ったりもします。なので、やっぱ楽しんでいくことすごく大事だと思うんですよ。疲れ切って目がしょぼんとしてじゃなくて、一緒に楽しみながら何かやっていくとですね、何かこう見えなかった景色が見えてきて、ひいてはいろんな人たちが幸せにいられる社会ってというのが、導くことができればいいんじゃないかなと思いました。

ぜひですね、福岡市に認知症フレンドリーセンターありますので、ぜひ福岡に来たときお寄りください。またホームページ・Instagram等々一生懸命頑張ってる情報提供、情報発信してますので、よかったらチェック・フォローをお願いします。今日はありがとうございました。

▼森田：今日は貴重な時間をいただきありがとうございます。私はですね、やっぱり基本は感謝をすることかなと、感謝をして、感謝されるってということが、人を幸せに元気にするんじゃないかなと思っています。私の仕事はありがとうございます。沢山飛び交う現場です。私もありがとうございます。沢山言ってますし、利用者さんからもありがとうございます。沢山言われる職場で、こういう仕事をしていて本当に自分は今幸だなというふう実感しています。皆さんも、日々感謝の気持ちを忘れずに、これからもそれぞれの現場で頑張りたいと思っています。高知県にもまた機会があれば、遊びに来てください。今日はありがとうございました。

▼大島：ありがとうございました。あんまり打ち合わせもなかったんですが、非常にいいそれぞれの取り組みの組み合わせで感謝します。

昨日の基調講演の近藤先生、それから加賀市の取り組みは、多分共通の相通じる考え方や行動原理が流れているような気がしまして、それを皆さんが違うアプローチでやってるってことだと思います。それぞれがそれぞれにすばらしいことだと思いますし、自分がヒントになると思ったところはいろいろあると思いますので、ぜひまたこの加賀市内でも、それから全国持ち帰られても、それを生かしていただければと思います。

今日はどうもありがとうございました。

